

## 新刊紹介

## 小論理學（ヘーゲル全集第一卷）

眞下信一譯  
脇坂光次譯

こゝに譯出されたる「小論理學」は、ヘーゲルの『哲學體系』第一部、「論理學」の全譯であり、尙、一八一八年、ベルリンに於ける講義に際してなされた聽講者に對する挨拶・第一版、第二版、第三版に對するヘーゲルの序文・序論及本文の補説が添へられてゐる。今、「論理學」と他の諸體系との關係、「論理學」の内容そのもの等に立入つて語らるべきでないとするも、論理學はヘーゲルに於ては、同時に形而上學であり、本體論と一であり、形式的、主觀的、悟性論理學を越えて包む客觀的、理性的論理學として、その成果と本質は辯證法であり、自然界、精神界の根本圖式として、存在の論理の性格に於て把握せられねばならず、まことの意味に於ける實踐の原理的指針であり、而して、現實の現段階の歴史的必然性にさへ睨目するならこの書の意義と力とは自から釋然たるものがあらう。

ヘーゲルの「論理學」は、之を他國語に移すことは困難であるとせられる。殊に第二編、本質論の翻譯は殆どヘーゲルの意味を失するであらうことは既に謂はれてゐる。併し、之は翻譯の免れ難き制限として許容せられねばならぬであらう。

邦譯は眞下、脇坂兩氏の共同勞作として、論理學本論及補説は脇坂氏が譯し、其他を眞下氏が譯したものである。同一著作の分擔譯に伴ふ多くの弊害にも拘らず、ヘーゲル自身の思想に深く沈潜し、原典に定着することに依て受容的、回顧的態度がとられることに依り、ヘーゲルの精神は遺憾なく移し替へられてゐる。併し、又、兩氏自から譯出上の差異なきではない。眞下氏は直譯を卻けて、自由な態度をとつてゐられる。例之、原典に直接、そこに見出されない語、句、章が多く補はれて、説明的であり、ために、随分思ひ切つて譯出された箇所も鮮しとしない。かゝる譯は懇切なる譯と云はるべきであり、原典に言はれてゐる何を特に知らんとするものにとつては至便である。併し、それが却つて讀みづらくし、思ひ誤らしめる所がないでもない。一言一句も忽せにしないヘーゲルの著作に於ける如き場合には、一方、意味は、又、逐次的に辿らるべきでもあらう。眞下氏の懇切、流暢なる譯に對し、脇坂氏は忠實に、逐次的に意味を移してゐられるやうである。實直なる氏の譯出が、原典が、いかに言はれてゐるかを傳へ得て、剛健なるヘーゲルの思想を移すに相應はしいかにみえる。

譯語は統一的に使用せられてはゐるが、併し夫々の場合、全體との關聯の許に、その時、そこで、最も適當と思はれるものが選ばれてゐる。例之、Gesetzseinが双關性、顯示在、媒介的的被定立存在、依屬存在、働くもの、關係に入り込んだもの、等々と譯され、Daseinが定在、質的規定、直接規定、等々と譯さるゝが如きである。Einheit, zu Grunde gehen, 及 Scheinen in sich selbst

